

オルタナティブ

人間論

文◎田坂広志
text = Hiroshi TASAKA

4

人類の知 第三の成熟 「個人の知」から「集合の知」へ

21世紀に起こる「人類の知 七つの成熟」の第三の成熟は、何か。

それは、「個人の知」から「集合の知」への成熟である。

言葉を換えれば、それは、「個人の持つ知識や智慧」を有効に活用する能力から、「集団の持つ知識や智慧」を有効に活用する能力への成熟とも言える。しかし、この「集団」とは、単に委員会や会議などで「様々な有識者」の智慧を集め、活用するという意味ではない。それは、「多くの草の根の人々」の知識や智慧を集め、活用する能力を意味している。

そのことを象徴するのが、1995年に始まったインターネット革命の第2段階、2005年に始まったウェブ2.0革命において語られ始めた次の二つの言葉である。

「群衆の叡智」

(Wisdom of Crowds)

「集合的知性」

(Collective Intelligence)

すなわち、「群衆の叡智」とは、「一人の専門家が意見を出すよりも、草の根の多くの人々が意見を出し合った方が、ときに優れた叡智を生み出す」という意味の言葉である。

例えば、ウェブの世界の「Yahoo知恵袋」や「OK Wave」のように、誰かの質問に対して、多くの草の根の人々が自由に知識と智慧を提供し合って答えに辿り着くコミュニティは、まさにこの「群衆の叡智」を活用した場であると言える。

また、「集合的知性」とは、例えば、世界中の数千人のコンピュータエンジニアが自発的に無償で集まり開発した基本ソフト「リナックス」に象徴されるものであるが、一人の優れた専門家や技術者の「知性」によってではなく、多数の専門家や技術者が集まり、互いの智慧を出し合って生まれてくる「集合的知性」は、これからの時代の「新たな知の在り方」を示している。

もとより、現代において、こうした「群衆の叡智」や「集合的知性」という形で「集合の知」を活かすことができるのは、「ネット革命」の進展という重要な条件があるが、実は、もう一つの重要な条件がある。

それは、「ボランタリー経済」の広がりと条件である。

なぜなら、多くの人々が無償で知識や智慧を提供するのは、それが単に一個人や一企業の利益を追求する「マネタリー経済」の営みではないからである。

互いに知識や智慧を出すことによって、人々が支え合い、助け合う。そうした「ボランタリー経済」の文化が広がっているからこそ、ネットを通じて多くの人々が、惜しみなく知識や智慧を提供する。

そのことを理解するとき、この「集合の知」とは、実は、人類全体が「利他の精神」へと成熟していく姿でもあることに気がつくだろう。

たさか・ひろし◎81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国パテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年、社会起業家フォーラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に「目に見えない資本主義」「未来を予見する5つの法則」など60冊余。